

Title	ニュー・ハリウッド映画期におけるロバート・アルトマン監督作品に刻まれる反古典的様式の独創性 1967年『宇宙大征服』から1976年『ビッグ・アメリカン』までの音声的・映像的実験によるナラティブ全体の革新についての分析研究(Abstract_要旨)
Author(s)	小野, 智恵
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2015-03-23
URL	http://dx.doi.org/10.14989/doctor.k19055
Right	学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2016/03/22に公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	小野 智恵
論文題目	ニュー・ハリウッド映画期におけるロバート・アルトマン監督作品に刻まれる反古典的様式の独創性——1967年『宇宙大征服』から1976年『ビッグ・アメリカン』までの音声的・映像的実験によるナラティヴ全体の革新についての分析研究		
(論文内容の要旨)			
<p>本学位申請論文は、傑出したアメリカ映画作家ロバート・アルトマン(Robert Altman, 1925-2006)の前半期作品群に解明されうる個人様式の特性に関して、新たな可能性を解釈し提示しようとする試みである。</p> <p>アルトマンは、1950年代初頭にインダストリアル・フィルム演出家として映画制作を開始させ、1967年には活動の場を主にハリウッド映画へと移した後、2006年に亡くなるまでコンスタントに傑出した独自の映画作品発表を続けた。とりわけ、1960年代末から1970年代半ばにかけて生起した「ニュー・ハリウッド」あるいは「ハリウッド・ルネサンス」と呼ばれる一連の反古典的ハリウッド映画において偉大な影響力をもつ作家である。テレビ監督から映画監督へと本格的に転身した後の1970年代から没後に至るまで、彼の作品群に顕れる個人様式を形容する表現として、アメリカ映画研究者たちの先行研究のみならず、あらゆる批評的言説においても、一貫して繰り返されるのは「技術的革新を駆使した即興性」というものである。たしかに、アルトマンは、最新技術を優秀に使用することによっても特徴づけられる「ニュー・ハリウッド」の作家たちのなかでも、音声と映像の両面において新しいテクノロジーを積極的に物語映画において活性化し、自らも、映画製作の現場において現在もスタンダードな手法のひとつとして用いられる音声システムを開発したことで知られる。しかし、ニュー・ハリウッド期に限っても11本を数えるアルトマンの映画作品における「実験的表現」のすべてが、「即興性」というたった一つのクリシェによって受容されることはない。</p> <p>本論文の目的は、その技術的革新性がその都度注目され言及されながらも、これまで深く映画作品の芸術的側面が議論されてこなかったアルトマンの音声的・映像的実験の数々と、それらによって彼の作品群に刻まれることになった個人様式について、その特性が顕著に示されるニュー・ハリウッド期の作品群を考察し、新たな解釈を加えることによって、技術的革新性の向こう側に見過ごされてきた、ナラティヴ全体を変容させうる芸術的革新性を明らかにすることである。</p> <p>本論文は4つの章と序論および結論からなる。以下に各章の議論を概括する。</p> <p>第1章では、アルトマン監督の独創性として知られる、音声表現とナラティヴ構造との連関が議論される。その音声表現は、彼が本格的にハリウッドに進出した『宇宙大征服』(1967)において既に実験されていたものだが、『M*A*S*H マッシュ』(1970)での大胆な試みを経て、『カリフォルニア・スプリット』(1974)において劇的な飛躍的革新化を遂げることになる。この革新性に貢献したのは、アルトマンらが開発した最新の映画音声録音システムであった。新しい録音システムを用いて行われた音声表現は、『ナッシュビル』(1975)にいたって、いわば完成を見る。本章では、その画期的音声表現が『ナッシュビル』のナラティヴ構造に影響を与えた可能性が検討される。従来、指摘されてきた、古典的ハリウッド映画に、典型的ナラティヴ構造を持つと考えられてきた『ナッシュビル』のナラティヴ構造が、その古典作品の持つ特徴とは大きく異なる独自の特徴を持つことが見出され、その特徴が上記の多数の同時音声表現に由来するものであることが示される。また、そこに至るまでの段階的な兆しを示す『雨にぬれた舗道』(1969)と『B I R D★S H T』(1970)においてもなされた。本章において分析される「即興性」</p>			

とは異なる特質は、古典的ハリウッド映画の持つ主人公の「中心性」を覆すものである。

第2章では、『ビッグ・アメリカン』(1976)、『ボウイ&キーチ』(1974)、『ギャンブラー』(1971)、『ロング・グッドバイ』(1973)、『カリフォルニア・スプリット』、『雨にぬれた舗道』における主人公の表象についての議論が行われる。1975年と76年にそれぞれ発表された先行レビューおよび先行論考において、アルトマン監督作の主人公に顕著なモチヴェーションの曖昧さが指摘されていたが、その要因は明らかにされなかった。ここでは、その要因について5つの可能性が検討される。それらはすべて、「レンズの選択」、「フィルム加工技術」、「撮影法」、「編集法」といった視覚的形式に求められるものである。そこでは主人公について、5作品とはまったく異なる表象がなされた映画『イメージズ』(1972)もまた比較の対象とされる。本章において分析される「即興性」とは異なる特質は、古典的ハリウッド映画の持つ主人公のモチヴェーションの「明瞭性」を覆すものである。

第3章では、アルトマンの署名のひとつとされる「忍び寄るズーム・ショット」の独自性が議論される。アメリカ主流映画においてニュー・ハリウッド期と重なるように隆盛時代を迎えたズーム・ショットは、実のところ、現在に至るまでドリー・ショットの代替手段としての立場に甘んじてきた。しかし、『ギャンブラー』のあるシーケンスにおけるズーム・ショットには、ドリー・ショットとは異なる独自の表現が見出せるのである。それは、アルトマンのズーム・ショットについてこれまで指摘されてきた特質とは異なるものである。本章において分析される「即興性」とは異なる特質は、古典的ハリウッド映画の持つ映像描写の外面的かつ内面的な「奥行き」あるいは「深さ」を覆すものである。

第4章では、『ロング・グッドバイ』における独特なテーマ論についての議論がなされる。1930年代末から始まるハリウッド映画独自のジャンル映画〈フィルム・ノワール〉に対する修正主義ジャンル映画と指摘されてきた『ロング・グッドバイ』が、〈フィルム・ノワール〉というジャンルの枠を多様に超えて参照する、4つの音声的・視覚的な既知の規範が吟味される。本章において分析される「即興性」とは異なる特質は、古典的ハリウッド映画の持つ、主人公と物語と映像と音響の「一致性」および「連続性」を覆すものである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、映画作家として半世紀以上にわたって革新的活動をし、1960年代末から1970年代半ばにかけて生起された「ニュー・ハリウッド」あるいは「ハリウッド・ルネサンス」と呼ばれる、古典的ハリウッド映画とは異質な芸術指向性の高い映画監督ロバート・アルトマンによる一連のムーヴメント作品上に感受される本質的な特徴に関して、新たな解釈を施そうと企図されたすぐれた映画美学的探究である。

音響録音と撮影方式の当時の最新技術を積極的に採用することで知られたアルトマンによる固有表現としての「オーヴァーラッピング・ダイアログ（重なり合う台詞）」や「ズーム・ショット」、あるいは「超望遠レンズの駆使」、「ポスト・フラッシング法によるフィルム加工」といった技術的革新に着目すると同時に、これらの音声的・映像的な実験の革新的萌芽が、他者のニュー・ハリウッド映画期において、最高の芸術映画作家たることを、本論文は解釈分析して議論を進める。

本論の学術的意義は、第一に、肯定的にも否定的にも、その技術的側面ばかりが従来、強調説明され、もっぱら「技術的革新を駆使した即興」といった、なかば硬直化した常套句を用いられた実験的表現様式に再解釈を加え、精緻に分析し直すことによって、それらが単なる「技術的革新」にとどまるものではなく、古典的ハリウッド映画における物語構造や、人物の内面描写の革新化をはかり、ナラティヴ全体を変容させる真なる「芸術的革新」であったと捉え直した点にある。

むしろ「即興性」という性質自体、ハリウッド・ルネサンスの名に恥じない芸術的革新のもたらした結果のひとつであるとも言えるだろう。しかし、その言葉に含意されるのは「偶然的発見の重視」である。

本論文の第二の意義は、上記の音声的・映像的な実験をともなう表現が、伝統的な古典的ハリウッド映画のもつ本質的な特徴、すなわち「中心性」、「明瞭性」、「深淵性」、「一致性」、「連続性」に対するアンチテーゼとして緻密に組み立てられた芸術表現映画であることを解明した点にある。

さらに、古典的な特徴を有する通常のハリウッド映画作品との比較だけでなく、古典期の映画作家ではあるものの、これまで必ずしも古典的ハリウッド映画作家とは単純にみなされていなかった革新的映画作家たちによる作品との比較分析も厳密に実施し、精緻な分析を施すことによって、アルトマンによる作品群の革新性を際立たせている。またハリウッド・ルネサンスを担った同時代の映画解釈者たちのなかでも、とりわけ新しいテクノロジーの導入に意欲的だったアルトマンの映画作品についてのレビューや映画紹介番組、あるいはインタビュー、新聞記事などを、当時の映画解釈資料として広範に用いることによって、映画研究者のみならず、当時の観客たる映画批評家やレビューアーたちに、これらの最新技術が当時どのように受け止められていたかを動態的に捉えようとする態度も評価に値する。

もっとも、このすぐれた映画作家が芸術的探究を試みたのはニュー・ハリウッド期

においてだけではない。他の時代に制作／演出された作品の分析については、いまだ考察の余地を残している。

とはいえ、本論文において提示された解釈はかなり独創的なものであり、これまでの先行研究や批評的言説が新技術の陰に見落としていた、この映画作家による芸術的挑戦の特異的意義を分析することに成功している。従来のアルトマン監督作品に対する先入見を覆そうとするその議論は、映画研究としての新しさを備えている。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年1月8日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降